

講演 「福島江開削に学ぶ」長岡郷土史研究会顧問 今井雄介さん

郷土史会の顧問で、これまでは信濃川の洪水の話をしてきました。福島江について話すのは今日が初めてです。時間が短いので皆さんのお手元にある資料を読む形になりますが、ご勘弁ください。まず、なぜこのような福島江を作らなければいけなかったということで、治水の問題があります。

江戸時代初期の地図を見ると真ん中に少し斜めになっていますが信濃川が流れています。この信濃川の右上のほうに苗を植えた田んぼがあります。その一番下のところの細長い部分が信濃川の洪水による自然堤防です。妙見から直接的に自然堤防が作られて耕作が進められていましたが、自然堤防東側と東丘陵間は自然堤防によって閉鎖されて信濃川の水が一切、東側に流れなくなってしまいました。必要な用水は、浄土川、太田川、柿川、栖吉川、成願寺川がありますが、上流にも田んぼや集落があり、下流で田を耕すための水は不十分。その下流の八丁瀉の近くに福島瀉の庄屋・桑原久右衛門の集落がありました。その地域では、上流で水が使われるため、雨の少ない年は干害が起こります。そこで「なんとかしなければ」と動き出したのが桑原久右衛門です。地図に八丁瀉があります。上流地域は扇状地で信濃川の傾斜が強く、砂利を運ぶような勢いの強い水で、堤防を破るような洪水をしょっちゅう起こしていました。そして八丁瀉は、ほとんど傾斜がないため水の動きが悪く、雨が降ると水が溜まってしまう排水不良の地でした。

治水の関係から考えていくと、堤防の上流地域は洪水の被害はあるけれど、水は不足しないので農業が盛んに行われています。ところが下流では水不足で生活が苦しい。そこで先ほどの福島村の庄屋・桑原久右衛門です。この人は、自分たちの生活を豊かにするために3年間かけて地域を渡り歩き、地勢を確認しました。既に用水が通る取水口できている、扇状地最南端の妙見から始めたらいいと計画を立てました。用水は直線に作れば一番、お金もかからず、価値の高いものになりますが、途中で田んぼを作っている人がいます。できるだけ用水をまっすぐ作るために、田んぼを作る人たちを説得するために多くの苦労があったと思います。彼がやり始めた仕事というのは、単なる土地の様子や地質調査だけではなく、用水利用者の意見や争いの起きた場所での実態を知ることが重視していました。それだけの知恵のある人だったことを頭においてください。

それから高山村の庄屋・穂刈茂左衛門も何とか水路の改善を考えていました。桑原久右衛門は、「島江」「中江」「犬茂江」の通称三ヶ江とよばれる取水江を統括していた穂刈茂左衛門とも話し合いをして、しっかりしたものを作るという合意をしながら仕事を進めました。自分の利権だけではなくお互いに良いものを作ろうとしていました。妙見から信濃川の水を取水、十日町・宮内を経て、長岡の東側を栖吉川に合流させ、下々条を抜けて十二瀉で猿橋川に流すという延長20<sup>キロメートル</sup>の計画を立て、1647(正保4)年、「開削の意見書」を長岡藩に提出しました。

その結果、初代の藩主がすぐに許可してくれました。農水の足りない地域の関係のある

村々の人に話をして協力を仰ぎ、同意を得たことも大きかったようです。村人も用水を作ってほしいという思いが強かったのでしょう。計画は水の流れる水路を4間、両側に川を守るために必要な土地を4間ずつ、合計12間の幅の土地を確保するものでした。上組と下組（北組）の村人を説得し、久右衛門は自ら工事の監督をやりました。既成の川と用水が交差する場所、4か所は掛樋（かけとい）を掛け渡して通水しました。今の用水は川の下を潜り抜けてくるという形ですが、当時は掛樋を作って水を流していました。

実際に開削工事を始めていく中で問題がいくつか起きます。上流（上組）の一部農民には恩恵少なしと潰れ地（用水路や道路などを作るために田畑の一部がつぶされる土地のこと）にすることに反対し、紛争を起こすこともありました。また、反対者のいるところでは夜間こっそりと測量をすることもありました。傾斜を調べるために、長さ5尺の緒穀（おがら）を田面（たずら）に立て、その上にローソクを灯し、高さを測量したこともありました。長岡城の本丸近くでは、藩の意向で一般の人夫を雇わず、足軽・茶坊主・藩士が土方仕事をさせられたため、九右衛門は恨まれ、迫害を加える者もありました。そのため、夜更けになってから番人と見回りすることも再三ありました。迫害が自分の家にまで及ぶようになったとき、やむを得ず小作で東山の佐野新田に住む佐藤六蔵の家に数か月間、身を隠し、時折見回りに出かけたともいわれています。ときには死人を運ぶ駕籠「死堂駕籠（しどうかご）」に乗って見回ったこともありました。これなら誰も咎める人はいませんね。

そんなことをやりながらも用水路は実現の方向に向かっていきまして、1651(慶安4)年、3年間で20キョウシの用水江掘削を完了します。桑原久右衛門は、報奨を一切受け取りませんでした。農民の喜びを己の喜びとする。それがこの人の考え方なんです。そして、こんな歌を作りました。「かさねたる 思ひのしるしに あらわれて 青田の面に 見ゆる月かげ」。水のない田んぼが多かったので田んぼに月影が映ることがなかったんですね。このとき、月が水に映る様子を見るだけでも彼にとっては心が休まることだったのでしょう。桑原久右衛門は1654(承応3)年に79歳で亡くなりました。

完成後、問題になってきたのが取水口です。信濃川から水を取るわけですが、信濃川の水は砂を大量に含んでいるので岸辺に砂が溜まり、取水口を塞いでしまいます。そうなる場所を変えて取水口を新しく設けなければなりません。妙見のところからずっと水を引いてきたのが困難になってきたので地勢や水勢を調査して、下流の三俵野（さんびょうの）に移設し、藩の許可を得て、取り付け水路を掘り下げ、既成水路に接続しました。小さな村・三俵野に取水口を設けことで、下流の村の耕地にも水が生き渡り、水不足の心配は解消されました。また、水を見守る番人を付けました。開削当初から長岡藩にとって重要な用水路であることから水路の管理には直接指示を出していました。北組では北組御蔵に専門の高山年番を置き、村々への人夫割当などの指示を行っていました。問題が起きないように対策を講じ、和をもって支えあう態勢ができていました。藩の理解があったからできたことでしょう。1687(貞享4)年には、草生津村の大庄屋・山田伝兵衛が人足一万人を動員して、白岩（妙高村）の崖下の岩をくり抜き、江幅を広げて取水口を改修しました。それ

から 1813(文化 10)年に「江浚(えさら)いの減少」というのがありました。福島江であっても、川の水が流れることで川底に砂や石が溜まります。そうすると水を流す量が少なくなりますから、用水の土を浚うのです。山田伝兵衛の子孫・庄八は三俵野村の大江口を締め切って水道を伏せ、通水の弁を図りました。昭八は江浚いの普請に動員する人足のうち 1 万人を減らした功績「江浚いの減少」によって、藩から割元上座(各組に 5 人いる割元が全部城に集められたときに上のほうに置かれる)に任じられ、扶持米を支給されました。

福島江完成後の米の収穫高、実際は田んぼの面積ですが資料には石高で書いてあります。開削後の 1651(慶安 4)年、上組の取れ高は 2300 余石、下(北組) 7200 余石。合わせて 9500 石になりました。1767(明和 4)年には上組 6501 石、北組が 1万3652 石で合計 2万153 石。福島江が完成したおかげで恩恵を受けた村々の数は上組 26 か村、北組 21 か村、合計 47 か村です。そして福島江というのは、これだけで終わっていないのです。福島江ができるまで途中で水が必要なところがあれば何本も小さな用水を引いています。そして 1767(明和 4)年、新組の地域の桑原久右衛門の福島村を含む福島が 2830 石、中村が 269 石、弥次右衛門新田 121 石、大黒新田 40 石と、全体で北組の 24%にあたります。今までにない大きな成果を福島江が作り出しました。これによって 7万4千石の石高であった長岡藩が 14 万石という約倍の収穫高になったのです。その後、桑原久右衛門没後 250 年にあたる 1903(明治 36)年に福島江の掘削記念碑が建立されました。現在は福島江土地改良区敷地内に移設されています。

終わりに、福島江は明治以降さらに国の管轄となり、近代化・現代化されました。まず、掛樋はサイホンで交差しました。それから水路の変更。街づくりに関わって駅の東側に桜並木があります。以前は曲がっていたのですが直線になりました。それまで別々の用水路だった福島江の取水口とその上流から取水していた東大新江の取水口を一緒にする工事をしたことで、栃尾からの刈矢田川の調整もうまくいくようになりました。その結果、見附市、三条市地域への福島江の拡大用水地になっています。江戸時代の範囲よりもっと広く、福島江が利用されているということで、福島江の存在意義の高まりを感じます。

報告 農事組合法人 花の香代表理事 高橋正人さん

農事組合法人花の香の高橋と申します。長岡市のはずれにあります、小国からやってきました。先ほどの福島江の話がありましたが、我々の小国地域でもこうした昔の水の苦労話は聞いておりました。かつては山があったのを真ん中から川の長さまで掘り分け、全く水のない部落で山に長いトンネルを掘って水を引いて、田んぼが作れるようになったそうです。小国地域には、まだそのような地域も残っています。私たちは今、農業法人になって圃場整備が済んだ恵まれた環境で農業をやっています。田んぼの場合でも、ちょっと蛇口をひねれば水が出るという環境で野菜作りができます。今は恵まれた時代だと改めて感じています。

我々の小国地域の活動内容を紹介します。長岡市のはずれの小さい盆地で町全体が中山

間地のような場所です。長岡の平野や柏崎で農業をする人とは違った課題を抱えています。  
※聞こえにくいです。

我々の法人は2007(平成19)年に着工して、翌年に農場補助を立ち上げました。当時の小国の圃場整備の大部分がひとつのたんぼが1畝くくりの、いわゆる10反たんぼで非常に大きなたんぼになっていました。しかしながら全面積30畝のところ、約100人地権者が出ます。単純に考えても一つのたんぼの中にたくさんの地権者がいるということです。地権者の一人がたんぼを作りたいといっても他の人と一つのたんぼになっているのでなかなか圃場をやりたいということができない。こういう形の圃場整備は当初、いろいろ苦労があったと思いますが比較的スムーズに話がまとまって、生産組合を作ってまかせるという形にまとまってきたわけです。全部集積がまとまって2012(平成24)年、30畝の圃場整備が完成しました。こういう風にいろいろな農家の人が生産組合を作って任せますとなった背景にはなかなか※ここから聞き取れません。特に小国地区には〜いっこあたりの面積が〜ほとんどの※49分まで

そういった状況は圃場整備によって恵まれた環境ができたとはいえ、今もまだ続いているという状況であります。そうした中でなんとか若い人、後継者に興味を持ってもらって小国に定住してもらいたいという気持ちでいます。

活動としては30畝のうち、約23畝をコシヒカリとこしいぶきを作っております。残りの7畝のうち、大豆が6.5畝、枝豆1畝(※計算が合わない)、ハウスなどで園芸を行っています。小国の特産品の「八石なす」とカリフラワーに力を入れております。水稻は特別栽培米のコシヒカリを中心に作っています。特に力を入れているのが、八石なすというブランドもののなすで、小国では30数年前からブランドなすとして栽培が始まり、今は東京市場のほうでも浅漬け用のなすとして引き合いがあります。先輩農家の方が育ててくれた小国の名産を今、継承しているということです。10畝-1反作ると年間150万ぐらいの売り上げがあると聞き、当初は期待をもって作っていましたが、1年目は3分の1も届かず。農業法人ですので年に一度の総会で「儲からないからやめたほうがいい」と厳しい意見いただきました。その一方で応援もあり、それを励みに今日まで7、8年継続しています。3年目ごろから落ち着いてきて、5年目からは順調で心配がないところまでできました。今は収穫量も売り上げも安心して黒字が出るようによくくなりました。昔から小国は米づくりが盛んなところですが、農業といえば米が中心だったのですが、そんな中で園芸を続けてきた理由は、どうしても30畝の規模で後継者を2人も3人も雇っていくには仕事がないということがあります。そういうことで園芸で米を補うような形で、年間を通した仕事をなんとか作っています。小国は過疎・高齢化がどんどん進んでいますので少しでも若い人が興味を持って残ってくればいいなという気持ちで仕事を作っています。今のところ売り上げの中で園芸の占める割合がようやく4分の1ほどになってきました。圃場整備で水が楽に供給できるので園芸をするにも畑にトラックで水を運んだりしなくても良いの

で、大規模に作付けができます。そのような可能性をこれから少しずつ実績を積みながら確かなものにしていきたいと思っています。

報告 農事組合法人矢田営農組合代表理事 石黒芳和さん

写真は、ことしの稲刈りのときの写真をドローンで撮影した風景です。うちの集落は 70 件強ほどの集落になります。位置的には国道 8 号線から曾地峠を下って左側に入ったところ。ことしは農地の集積を行い、農作業が非常にスムーズに進んでいます。この集落の農者がだいたい 60 畝なのですが、自分たち営農組合では約 3 分の 1、23 畝を管理しています。残りの面積は約 3 件の大規模農家が管理をしていますが、彼らはすべて後継者がおりませんので、できなくなったら組合が引き受けます。ことしも一件の農家の刈り取りがずいぶん手間取り、ギブアップして営農組合に稲刈りの依頼がきたので、スタッフを派遣して矢田の農地の稲刈りを全て終了しました。自分たちは矢田という集落なのでそれを文字で「ヤタらうんめえ」というマークの商標登録をとりまして、農産物にはこのシールを貼って販売しています。経営理念は、明るく楽しく、一歩先を行く営農組合を挙げています。明るくというのは集落営農ですので、まして高齢化していますので明るくないといかんだろうと。農業というと、どうしても辛い部分がありますので、楽しくやりたいと。一歩先行くというのは、農産物がなかなか売れないので一歩前を出て、自ら動いて売りにいこうという意味です。これについては、先日、一歩先でなく 2 歩 3 歩ともっと先へ行くと指導をいただいたところです。

主力はコシヒカリの特別栽培米です。作っている農産物は、すべて県の認証を受けています。あとは枝豆が 6 月末から 10 月まで 4 か月間、6 品種を作付けの時期をずらしながら作っています。あと、「まこもだけ」を栽培しています。ことし、公益社団法人の小冊子にわがふるさとの自慢の野菜ということで「まこもだけ」を載せてもらいました。「まこもだけ」は、あちこちで少しずつ栽培されています。ことしも福井県で行われた「まこもサミット」の 9 回目に研修を兼ねて行ってきました。自分たちは営農組合として 7 反という面積を販売しています。ひとつの組織で、まこもだけを 7 反も作っているところは珍しく、こうして取り上げられたりします。まこもだけは、先日、地元 NHK テレビの取材も受けました。おかげ様で販売に苦労していましたが順調になってきました。それから 2008(平成 20)年に白鳥が組合の前の田んぼに三羽ほど飛来しました。それが順調に数を増やして昨年は 100 羽を超える白鳥が飛来しています。100 羽の餌は、くず米を確保しておいて餌付けをしています。くず米を撒くと白鳥が寄ってくる。そのうち自分たちの手のひらから餌をとってくればいいなと考えています。

組合の設立は 2007(平成 19)年 1 月、中越沖地震の前に立ち上げました。その年の 7 月に中越沖地震が起り、被災して惨憺たるものでした。その年の枝豆はすべて手でもいで、作業が終わると支給されたコンビニのおにぎりを食べ、自衛隊が用意した風呂にはいって寝るという厳しい状況でスタートしました。今では懐かしい思い出です。ハウスを利用し

てオータムポエムを作りながら5月から切り花、6月末から10月までは枝豆、その後にカリフラワー、ブロッコリーなどを作っています。それが終わったらハウスにオータムポエムを植えて1年間作業が途切れないように組んでいます。また、農産物を利用して加工漬物も作っています。まこもだけ、カリフラワー、きゅうりなどを入れたミックス漬けの売り上げが良いです。有機・無農薬もやっています。ビオトープを作ってメダカを植えています。ことし20歳の農業大学を卒業した子を増やしまして、従業員は3名。年齢的には75歳から20歳まで幅広い人たちが組合に関わってくれています。パートも含め年間20名。まこもだけを使ったちまきなどをおばちゃんたちが作っています。組合としてイベントで物販などに出かけています。ことしは矢田農営組合ののぼりも作りました。販売のときに掲げています。また、ことしは日本橋新宿三越本店前の第四銀行の建物の前で枝豆と漬物の物販をしました。さすが東京なので呼び込みをしなくても一日千人のお客様が入ってきます。枝豆と漬物200円から300円の低価格ですが一日10万円売り上げ、三日間で30万円以上の売り上げを出してきました。

営農組合の取り組みのひとつとしてインバウンド（訪日外国旅行者）振興に力を入れていきます。3年前からそういった取り組みをフェイスブックで情報発信しています。ことしの5月には、台湾から飛行機で田植え体験に来てくれました。うれしかったですね。外国からまたは、首都圏から外国人が来てくれます。日本人もいます。去年は蛍の鑑賞会も企画してみました。柏崎の大花火のときも矢田の枝豆で一杯飲みながら花火を見る会を企画をしました。これらはすべて情報発信をしています。収穫祭では8月の頭に部落の方に来ていただいて納涼会をしました。自分たちの建物から夕陽がよくみえるので、夕日を見ながら一杯やるという企画で。部落は70件強ですが、ほぼ全戸から子供からお年寄りまで参加してくれました。ありがたいと思っています。以前、盆踊りをやっていたときはなかなか人が集まらなかったのですが、納涼会は多くの方が参加してくれています。回数が重なるとマンネリ化しますのでそれは避けたいと思って、歌手を呼んで歌謡ショーをやってみました。こういうイベントも情報発信をしているので、地元以外の方も参加してくれています。だんだん参加者が増えています。ことしの柏崎の農業まつりには、まこもだけの粉末をうどん粉に練りこんだ「まこもうどん」というのを作り、販売しました。100食ほど用意しましたが、あっという間に完売しました。非常に面白かったです。とにかく失敗を恐れない、何でもかんでも挑戦しています。

最後に今後の取り組みですが、インバウンドの取り組みを続けていきたいと思っています。宿泊施設がないのですが、滞在型を目指して準備していきたいです。田舎体験を含めて農産物を買っていただけたらと思っています。東京に行って野菜を売ったり、イベントをアピールしたり、少しずつですが成果が出ていると思っています。農業との情報をもっと広げていかなければならないと思っていますし、通信技術を使ったコミュニケーションICT(Internet and Communication Technology)やIoT(Internet of Things)にも興味があります。昨年ネット上で決算を作成するような試みやリアルタイムで決算書を作成するよ

うにしています。とにかく、農業は厳しいけれど、自分の中で迷ったら進むことにしています。前へ前へ進めと思ってやっています。仲間と楽しく、補助金を上手に使いながら黒字でやっていければいいかなと。これからもどんどん前へ攻めて経営を発展させたいと思います。

#### 座談会「水利の恵みとこれからの中越地域の農業」

伊藤 これから座談会を始めます。今ほど3人の方からお話をいただきました。それぞれの講師の方の感慨深い話ばかりでよかったですと思っています。最初に柏崎土地改良区事務局長の武田勤さんからお話いただきます。今日は今井さんから福島江のお話がありましたが、柏崎地域の水利の問題も取り上げてみたいと思います。柏崎地域は高い山がない分、水問題の苦勞の多いところではなかったかと思います。そのあたりの管内の地理的特徴や歴史、特に藤井堰と鯖石川の堰につきまして武田さんからご紹介お願いいたします。

武田 今ほど伊藤先生から話をいただきました柏崎の地理的な特徴と歴史。そして藤井堰について話します。柏崎の図面を見ながら聞いていただけたらと思います。柏崎刈羽地域の特徴ですが、今ほど伊藤先生いわれたように、高い山はありません。河川につきましては鯖石川、鶴川、別山川と代表する3つの川があります。川の長さも40<sup>キロ</sup>程度で山が浅く、高くないので、雨が降れば、すぐ水が出てしまいますし、雨が降らなければ、すぐに渇水になるという特徴の地形です。今、柏崎では3590<sup>ヘクタール</sup>でダムがあります。私の勤めている柏崎土地改良区は管内が3500<sup>ヘクタール</sup>で、約20ほどの土地改良区で計画とかぶっている地域です。歴史的に水不足の地形で、河川には代表的な藤井堰があります。NHKの大河ドラマ「天地人」の主人公・直江兼続が藤井という村に堰を作るようにと命令を出したのが起源といわれています。それが1595(文禄4)年と記されています。当時、出た掟書の中に、新田開発をすれば5年間年貢を免除するとあり、皆さん一生懸命開田しました。けれども地形の問題などがあり、開田しても用水が出ないというような状態で、周囲で水争いがずっと続いたと記録に載っています。その後、直江兼続は関ヶ原、上杉は米沢に行ってしまうと領主が変わったこともありますが、約50年後の1644(寛永21・正保元)年、直江兼続ほど有名ではありませんが、刈羽郡奉行としてやってきた青山瀬兵衛が藤井堰の改修工事を行い、10年かけて完成させました。400年ぐらい前の記録を見ると領主が石高を上げるために新田を開発し、そこには水が必要だということで用水施設をいろいろな手段で作ってきました。ところが今のような技術がないので、大雨が降ればすぐ流れるという繰り返しでした。この写真は近年、水不足だった1994(平成6)年、干害用の取水施設がある河川の川底までがひび割れるほど渇水になったときのものです。次の写真は藤井堰の上流にある善根堰という堰です。今現在の善根堰では全量取水をし、下流へ流す藤井堰に行く分と善根堰に自益になる領地の2.8対1の分水になっています。これが作られた背景には、歴史的な水論がありました。1771(天明元)年ごろ、藤井堰の組では善根・南条・加納の3か村が下流への流水を求めて訴訟を起こします。上流の与板堰を巡っても争いがあ

り、1773(安永 2)年に善根堰と下流の藤井堰の分配比が3対1に決まったという歴史があります。現在の藤井堰を作る水をもって来るにあたって、当時の歴史的な3対1の割合が記された古文書が昔の役場に残っていました。工事のたびに堰が改修されたり、河川が改修されてきましたが、近代に入って、集中豪雨の影響などにより善根堰の決壊が生じたときに、公共事業によって整備されることを契機として上流と下流の用水配分の議論が再熟しました。そのときに1773(安永 2)年に決まった3対1の古文書を用いて、訴えが認められて善根堰1対藤井堰2.8という分水比になりました。こういった形で歴史的な苦勞の中で上流・下流にきちんと水が配分され、藤井堰のおかげで安定的に農業が続けられています。

伊藤 ありがとうございます。鯖石川の上流下流で繰り広げられたお話を交えてお話いただきました。私も今日、晴れ間を見て、現場まで足を延ばしてみたのですが、かつての江戸時代の人たちの水に対する執念・意気込みが感じられるような雰囲気でした。こういった歴史を踏まえて、柏崎地域の用水を現在どのように確保されているか武田さん、ご紹介をお願いします。

武田 長年続いた渇水を何とかしたいと思い、1949(昭和 24)年に経営事業で計画しましたが途中で頓挫しました。そして1997(平成 9)年、国営柏崎周辺農業水利事業着工となりました。2010(平成 22)年には鯖石川の支流の栃ヶ原ダム、別山川の支流の後谷ダムの併用を開始しています。依然、溜め池や渓流水だけでやっている地域については、順次、県営事業などで河川水を送る水路パイプをつけてもらっていますが、まだ全てのところまで計画通りには行われていません。でも、ことしの梅雨あけからお盆明けには渇水という言葉は聞かれませんでした。

伊藤 ありがとうございます。さらに用水の改善のためにダムを造りながらバックアップしていこうという体制になっているようです。石黒さんの地域は鯖石川からすると右岸のほうに位置するわけですが、用水の恵みはどのように受けてこられたか、苦勞してこられたか。いかがでしょうか。

石黒 矢田地区そのものは、まだ恩恵は受けていません。これから受ける段階に入ります。今まで1993(平成 5)年、1994(平成 6)年に干害があったときには、個人でポンプの水をくみ上げてまた戻すと、何回も水をリサイクルして何とか秋の収穫につなげたという事実があります。水に関しては、陰口を言われるなどの争いもありました。今現在は足りない分は下のほうにポンプがありますので、そこから上のほうにくみ上げてリサイクルをしているという状況です。これからダムの水が入ってくれば常に新鮮な水があるので安心できると思います。

伊藤 これからの整備が楽しみですね。それでは話の舞台を今度は信濃川に移します。先ほど今井さんから福島江の開削に関係したお話を聞きました。20<sup>キ</sup>もの開削が行われたということでびっくりしました。昔の人の用水開削に対する思いに、本当に頭が下がる思いです。これだけの情熱は一体どこから来たと思いますか。

今井 人徳といえますか、リーダー桑原久右衛門の考え方でしょうか。地域の問題点を解



決するためにはどうしても用水が必要だという彼の説明をほかの人々も納得できた。そのへんにあるのではという気がしますね。そうでなければ何万人という人足の提供はできなかったでしょう。もう一つは、問題を解決するために藩の協力があったということです。藩には代官所みたいところがあるわけです。その人たちを通じて庄屋や各関係者に「〇月〇日、こういう相談があるから集まってくれ」と文書で連絡することができたわけです。それからもう一つは、活動に対しての報酬があったということです。無償ではありません。報酬があることが前提。人間が働いてもらうためには大事なことだと思うのですが、先ほどの話ではあまり強調しませんでした。いずれにしても指導者である桑原久右衛門をはじめ、山田伝兵衛も、ずっと離れた長正橋のたもとの地域の人で、この地と何も関係ないのに荒地を開拓するために活躍してくれました。どうしても用水が必要なら福島江に協力していく人が多くいたのではないかと思います。

伊藤 ありがとうございます。終わりの時間も迫ってきたので、これからの地域農業をどのように展望していくか。高橋さんと石黒さん、お願いします。

高橋 この地で農業をやっていくことは苦しいと話しました。厳しいイメージばかりが伝わってしまったかもしれませんが、業績自体は年々、良くなってきていますし、受け入れ環境も少しずつできています。私も今日、皆さんのお話を聞いて勉強になりました。矢田営農さんのように楽しいイベントを企画するなど、若い人に楽しんでもらえるような事業を取り入れながら、がんばりたいと思います。

石黒 田んぼは厳しい部分もありますが、もう少し畑のほうに力を入れたいと思っています。今、枝豆が順調なので冷凍枝豆ができないかと考えています。そのための設備は高額になるので、自分たちの力だけでは難しいけれど行政から支援をいただいて。収穫がだぶつくときがありますので、そういうときに冷凍できたらと思っています。飲み屋さんに行くと枝豆を頼むとおいしくない枝豆しか出てこない。ぜひ、そういう店においしい枝豆を供給したいと思いますし、また、ハウスで作っているオータムポエムの売り上げを伸ばして経営を上げていけるとと思っています。

伊藤 最後に私から簡単な感想を述べて、お開きにしたいと思います。この連続講座は、水

利をテーマに農業王国新潟の実現に農業水利施設が果たしてきた役割とふるさとのことを考えてみるということで始まりました。第2回目の今日は福島江と柏崎刈羽地域のいろいろな水利を、先人たちが残した歴史に触れながら、その恩恵を受けて営んでいる農業についてゲストの方々から熱く語っていただきました。

私を感じたことの第1は、福島江の20<sup>km</sup>に渡る開削工事が調査期間3年、実施期間3年のわずか6年で完成したということです。驚異の情熱に心を打たれました。地理的条件が違うので一概にはいえませんが上越市にある上江用水路。世界かんがい施設遺産になっていますが、上江用水路は26<sup>km</sup>ありまして、開削にかかった時間は130年です。あまりにも違い過ぎます。長岡藩や今日、お話のあった桑原久右衛門のリーダーとしての人徳といっ

たものが重なって成功できたのだと思いました。

第2は当時、新田開発が進み、用水の需要が高まっていくようになると、その成果として藩の生産力も上がっていきました。用水によって地域の発展がもたらされたのです。いずれにしても米どころ新潟というのは、こういった先人たちの情熱で築き上げられてきたことを強く感じました。農業用水は、単に川の水を用水に流せば終わりというのではなく、限られた川の水をいかに公平に分配していくかという問題もありました。上流だけでくみ取ってしまうと下流から反発が起こります。どのように水の争いを公平に収めるか苦勞し、上流と下流で水の分配率を均等にしないという話がありました。水の争いに関しては訴訟も多く起きたと思われます。それを納める知恵に感銘を受けました。今日、現地に立って見て、昔の人の思いが体に伝わってくる感じがしました。できるだけ多くの人に、この施設を見ていただいて理解を深めていただければと思います。まさに水の一滴は血の一滴ということはこの地域の歴史が物語っています。

第3は、これらの地域農業の展望です。今の地域農業は高齢化・担い手不足という中で、高橋さんと石黒さんの話を聞いて、大変希望が持てるという印象を持ちました。お二人とも年間を通して仕事がなくならないように、後継者のためにもさまざまな工夫をしていました。さらに前進をしていただきたいと思います。今、日本の農業が大きな転換期を迎える中、お二人の取り組みが貴重な示唆を与えてくださると思います。二つの組織が地域をしっかりと束ねて地域の組織と連携しているところが一番素晴らしいと思います。これからは組織間同志が、まず連携し、水の問題についてもリーダーシップをとっていただけたら地域の農業はどんどんよくなっていくという期待も込めたいと思います。

さて、今回の講座に参加された皆さんは、今晚から召し上がる新米の味が少し味わい深く感じていただけるのではと思いますし、来年の春に見る福島江の桜の並木の景色も先人の皆さんの思いが伝わり、今までとはちょっと違った深い味わいが感じられると思います。このふるさとの豊かな実りがこれからも続くことを祈りまして、今日の連続講座をお開きにしたいと思います。